

## 近代化遺産の保全と利活用に対する NPO の役割

-旧国鉄士幌線を事例として-

### The Role of NPO for Preservation and Re-use of Civil Engineering Heritage Case Study of Old Shihoro Railway Line Bridges

日本大学 学生会員 ○神辺 晴美

日本大学 正会員 伊東 孝

#### 1. はじめに

文化遺産や産業遺産などの遺産をただ保全するのではなく、積極的に利活用しようとする動きが活発になっている。建物などの箱物系のものは、カフェや博物館へ転用したりと、さまざまな利活用が比較的容易になっている。しかし、ダムなどの塊系、橋などの骨組み系は箱物系とは異なり、利活用する方法が限られてしまっているため、利活用の推進が難しくなっている。

このような中、北海道大雪山国立公園では、旧国鉄士幌線跡の大小 50 以上のコンクリート橋梁群が残され、利活用が進められている。その保全と利活用において重要な役割を果たしているのが、「NPO ひがし大雪アーチ橋友の会」(以下「友の会」と略称)である。本稿は「友の会」の活動と、橋の保全と利活用における NPO の役割について明らかにすることを目的とする。

#### 2. 調査対象と方法

旧国鉄士幌線のコンクリート・アーチ橋梁群と、その保全と利活用を行う「友の会」を調査対象とする。「友の会」の活動内容を調べ、橋の保全と利活用における「友の会」の果たしている役割について明らかにする。

#### 3. 旧国鉄士幌線のコンクリート・アーチ橋梁群

旧国鉄士幌線は、1937 年(昭和 12)9 月に上士幌から糠平間、1939 年 11 月には糠平から十勝三股間が開業した。この鉄道橋梁群は、北海道で初めてつくられたコンクリート・アーチ橋であり、50 以上の橋が残されている。大雪山国立公園の中にあり、自然美と調和したデザインが採用され、そこに歴史の重みが変わり、ひがし大雪のランドマークとなっている。

近代化遺産として、1999 年(平成 11)、勇川橋梁、第三音更川橋梁、第五音更川橋梁、十三の沢橋梁の 4 つの橋梁が、2003 年には第六音更川橋梁、音更トンネルが登録文化財に登録されている。2001 年、アーチ橋梁群は「北海道遺産」として選定されている。

また『日本の近代土木遺産—現存する重要な土木構造 2000 選』(土木学会、2001 年)には、第三音更川橋梁、第五音更川橋梁、第六音更川橋梁、タウシュベツ川橋梁が記載されている。

#### 4. 橋梁群の保全と市民のかかわり

旧国鉄士幌線は、木材需要の低下、車の普及やバスの運行により経営不振に陥り、国鉄の分割・民営化に伴い、1987 年(昭和 62)3 月 22 日をもって廃止された。1996 年(平成 8)、国鉄清算事業団は 20 キロ区間に点在しているコンクリート・アーチ橋などの解体撤去を発表した。

コンクリート・アーチ橋を保存するため、同年 8 月から、糠平地区でアーチ橋の勉強会が始まり、1997 年 10 月には市民団体「ひがし大雪鉄道アーチ橋を保存する会」が設立された。保存運動は広がり、会員数 600 人、保存要望の署名は 6000 人にも達し(上士幌町の総人口とほぼ同数)、1998 年には橋の保存基金条約が制定されるにいたった。国鉄清算事業団は、土地の処分と構造物の処分を町に委託した。町ではその費用である 2 億 6100 万円を原資を保護基金に組み込んだ。翌 10 月にはコンクリート・アーチ橋を町で取得することが決められ、約 36.8 ヘクタール、33 の橋梁とトンネルひとつが取得された。

#### 5. 「友の会」の発足と活動内容

##### (1) 「友の会」の発足

1999 年に主要な 4 橋が登録有形文化財になったことをうけ、10 月に「ひがし大雪鉄道アーチ橋を保存する会」は解散、あらたに「ひがし大雪アーチ橋友の会」が設立された。そして「友の会」は、2004 年(平成 14)に NPO 法人への登記が完了した。2005 年の会員数は 282 名で、内分けは、上士幌町在住 88 名、十勝管内 51 名、その他北海道内 65 名、北海道外 78 名となっている。また活動内容としては、ファン・会員の拡大、利活用の推進、事務所の整備を行う予定である。

キーワード：近代化遺産、利活用、保全

連絡先：日本大学理工学部社会交通工学科 都市環境計画研究室

TEL 047-469-5572

FAX 047-469-2581

## (2) ファン・会員の拡大

ファン・会員の拡大のための事業として、①遠足の実施、②会員拡大のため、新規会員に「絵ハガキ」の進呈、③鉄道資料館で「アーチ橋工事写真展」の開催、④鉄道資料館の入館者数増大、⑤写真集『タウシュベツ』やアーチ橋絵ハガキおよび熊よけ鈴などの販売、⑥「アーチ橋写真コンテスト」の実施（写真展開催場所は未定）、⑦ホームページ全面リニューアル、⑧運営費の確保（助成金など）、⑨上士幌町観光協会、北海道遺産構想推進協議会などの諸団体への参加という9つの項目をあげている。

この中であげられた③と④に関連する鉄道資料館について述べる。鉄道資料館は、上士幌町から年間約3000万円を資料館管理費として委託され、「友の会」によって運営されている。受付も「友の会」のメンバーが行っている。鉄道博物館の入館者数は、2002年（平成14）2,869名、2003年3,833名、2004年4,624名、2005年は5,150名であり、年々増加している。訪問者増加の主な要因として、旅行雑誌に紹介されることが多くなったことがあげられる。しかし主要な橋梁群をものの10分ぐらい見て、すぐ帰ってしまう人が大多数を占めている。旧国鉄士幌線の橋梁群は、大雪山国立公園の中に位置する。動植物を保全する意味でも、過度の利用は環境破壊につながってしまう。そこで情報発信の場としての鉄道資料館の存在は重要となる。今後はただの観光ではない、教育的要素が含まれた観光が望まれている。

## (3) 利活用の推進

利活用の推進のため、①町からの委託事業として路線跡の草刈り、②鉄道資料館内での「鉄路再生事業」、③「アーチ橋模型」の製作をあげている。

ここでは利活用の推進事業として中心的な「鉄路再生事業」について述べる。「鉄路再生事業」とは、鉄道資料館の裏の敷地に路線を引き、人力トロッキを走らせることである。このプロジェクトは、以前は路線の残っていた箇所で行われたが、管理運営の問題で、鉄道資料館の裏にある鉄道路線跡地に設置しようという計画となった。一度撤去された路線を再度設置するという事例はとても珍しい。体験しながら、教育的な要素を含むとても面白い計画であり、2005年の11月に完成した。

## 6. NPOの役割

「友の会」は、助成金などを活動資金にしているので、年によって予算は大きく異なるが、町からの鉄道資料館管理費として3000万、会費600万、収益金650万、そして助成金と、年間4000～5000万円の予算である。基本的な運営方式としては、鉄道資料館に受付として会員一人が配置されている。その他はプロジェクトごとに人数を調整し、少ない予算の中でうまく運営している。「友の会」は資産的にはとても小さな団体だが、「友の会」の

果たす役割は、予算だけで図ることはできない。

「友の会」は近代化遺産の利活用を推進するため、行政とパートナーシップを組んでいる。本年度、環境省の事業で鉄道資料館からメトセツまでの約7km、旧幌加駅から第5音更川橋梁までの周遊コース700mが北海道自然歩道として整備された。自然歩道は、環境省の事業に、県の開発局、町、そして「友の会」が協力してできあがったものだ。第5音更川橋梁の自然歩道の例をみると、まず、道の開発局事務所から自然歩道に入るまでの道が開発局の整備となっている。町では看板と、川沿いの安全対策および環境保全のための手すりを設置している。そして「友の会」は、自然歩道がぬかるむと歩きにくくなるため、ウッドチップを敷くという事業をおこなった。これは「友の会」が積極的に橋梁群の保全と利活用推進の必要性を訴えてきたからこそ行われた事業であり、「友の会」だけではできない整備を行うことができた。

また「友の会」は、行政とのパートナーシップだけでなく、市民と行政をつなげる役割も担っている。「友の会」が住民と話をし、情報収集をする。それが行政の事業にも反映される仕組みになっている。

## 7. 結論

「友の会」は市民運動から始まり、橋梁群の保全の原動力となった。そして2004年にはNPOとなり、NPOという立場をうまく利用して、行政だけではできない視点・立場での近代化遺産を利用したまちづくりを行っている。「友の会」ができたからこそ、現在のように橋の利活用のための整備も行われた。橋梁の利活用はなかなか難しいものであるが、旧国鉄士幌線の橋梁群は、ネットワークを組み、自然歩道、博物館、トロッコ等の観光客受け入れのための整備をすることによって、より一層魅力的な場所となっている。しかし、整備は始まったばかりであり、これがどのような結果となるかはまだわからない状況である。今後とも注目していきたい。

## 参考文献

伊東 孝 『日本の近代化遺産』岩波新書、2000年